

[Memorabilia]

—Pethau Cofiadwy mewn Astudiaethau Cymraeg—

Rhif 4: 水谷宏「ネギ (Cennin) か、水仙 (Cennin Pedr) か」

本号は3月号とのことで、Dydd Gŵyl Ddewi に因んだこの主題を選んだ。カムリの国に興味を抱いている方々には、関心の深い主題である。

昨日、高知での「ソメイヨシノ」の開花の知らせが入った。この桜の一種は、日本の「国花」というよりは、東京都の「都花」であり、染井村（現在の豊島区巣鴨）から広まったので、明治初年に命名されたという（学習研究社「新世紀ビジュアル大辞典」）。広辞苑によれば、日本の「国花」は、「桜」または「菊」とあり、「日本で、桜の花の異称」となっている。従って、「桜」であればどんな種類でもいい、「菊」とともに、日本の「国花」なのである。しかし、どのような経緯でそうなったのか、また、いつの時代にそう「決められた」のかは、この種の国語辞典では分からない。詮索を続ければ、それなりのことははっきりするかも知れないが、果たして「史的根拠」と言える証拠が集められるのかは不明だが、専門の方のご指導を仰ぐ他ない。

カムリでは、守護聖人デウイの祝日3月1日に、帽子や胸に飾るのはネギなのか水仙なのか、が問題になることがある。そして、母親が娘に、胸に飾るのは水仙ではなくネギなのだと教える話については、本誌2号(昨年4月25日出版され、当初は、1号別刷りとして出版された)で触れた。事の始まりは、19世紀半ばに遡るようである。*Archaeologia Cambrensis* 第3号(3rd Series, 1857:399-401)に、編集者宛、'Origin of the Welsh Leek' という一文が、Brecon に住む J. Joseph という人から寄せられた。その前号で 'the real origin of the Welsh leek' についての情報提供を求められたのに対しての回答として寄せられたものである。参考になればとのことで、"The Praise of St. David's Day, shewing the reason why the Welshmen honour the Leek on that Day" というタイトルのバラードが紹介されている。その詩によれば、デウイの言いつけで、敵味方の区別のためにネギを付けて敵と戦って勝ったことが、そもそもの始まりであると歌っている。そして、この詩には第2部があり、それには、王室の皇太子たちや、Henry VIIも Elizabeth もネギを付けて祝っているので、'Royal Leek' (詩では、ネギは 'leek' と綴られている) と呼ぶべきだと歌う。そして、詩の後には、*Cambro-Briton*, ii: 182 からの 'The Leek' の一文も添えられ、3月1日にネギを付けるというこの習慣の真の起源は不明でありが、詮索は続いている。サクソン人との戦いで、デウイの命令で付けたという説のほか、Cadwallawn がネギ畑の近くで戦った説、さらには、Owen Pugheの説として、'Cymmortha' (助け合い) の習慣に起源を求め、農夫たちが農作業を助け合いで済ませた後、ネギを食したことに因んでいるという説もあるという。

J. Joseph (「1857年7月3日 Brecon にて」、と記されている以外、この人物については、*Dictionary of Welsh Biography, down to 1940* を調べては見たが、詳しいことは分からない) のこの一文は、あくまでもなぜカムリの人達がネギで飾ってデウイの祝日を祝うか、についての資料提供であり、水仙に関する記述は一切ない。とすれば、19世紀の半ばごろでは、まだ、ネギの他に水仙を付けるカムリの人はいなかったのではないかと推測できるのである。しかし、20世紀に入ると事情が少し異なってくるのである。The Story of the Nations のシリーズに含まれている O.M. Edwards (1902) の *Wales* という書物の索引 'Leek' の項 (p. 413) には、'Some take the daffodil as the national flower. The Welsh word *cennhinenn*, pl., *cennin*, is the same for both' という記述が見られるようになってくる。しかし、本文の記述では、あくまでもカムリの国の National Emblem はネギだとの見解に基づいている。即ち、同じ「国章」といっても、架空の動物である「赤き龍」the red dragon の起源にまつわる意味づけは、*Lludd a Llevelys* の物語にも現われており、古くからこの国の「伝説」に扱われてはいるものの、Cressy での勝利という歴史的事件に求めているのに対して、ネギのほうは、「Henry Vの勝利」にまつわる「伝説」に起源が求められている(同書 p. 255)。従って、執筆者である Edwards の念頭には、National Emblem は「赤き龍」と「ネギ」だけがあり、「水仙」は「国章」ではなく、日本の「桜」のような「国花」だったはずである。

さて、正面きってこの問題—カムリの国の「国章」は、ネギではなく水仙だとの